

題字揮毫に寄せて



浄土宗三州教区教区長
圓福寺 多賀孝昭

さんしゅう

多賀孝昭

三州の地は明治初期の廃仏毀釈によって仏教界全体が大
きな打撃を蒙り、その後浄土宗の諸先輩方が大変なご苦勞
をされながら、開教、寺院復興、新寺建立などの事業を成
し遂げてこられました。そして戦後米軍占領下にあった沖
縄の地にも、本土復帰後、念仏信仰の情熱にあふれた諸上
人方が新寺を建立されて今日の三州教区の姿があることに
深い敬意と感謝の念を禁じえません。

この度三州教区教化団の体制が整い、教化団報が発刊さ
れることに大きな喜びを感じています。今こそ、諸大徳が
集い、力を結集し、三州教区の新しい未来を切り開いてく
ださる事を願って、「さんしゅう」の題字を揮毫させていた
だきました。南九州の地にお念仏の声が力強く響き渡るこ
とを心から願っています。

教化団だより『さんしゅう』第2号
令和5年6月 佛歡喜日
発行・編集 浄土宗三州教区教化団
事務局 鹿児島組浄光寺
<https://sanshu.press>



令和4年11月10日 お寺の未来ミーティング

宮崎 ホテルメリージュ

廣照寺 副住職 木村瑞華



午前の部は「浄土宗開宗の御心」～お念佛からはじまる幸せ～という内容にて、浄土宗総合研究所から齋藤舜健先生において頂きました。先生曰く、次のように話しておられました。

世の中には大小様々な尺度からなる幸せが存在いたします。幸せとは満ち足りた状態ではありますが、幸せな状態が永遠に続くわけではございません。では、仏教という幸せとは何かと申しますと、心が何に対しても執着を起こさず、平らであり穏やかであることでございます。そうでありたい、と願うものの、凡夫の私たちにとっては不可能です。そんな私たちに法然上人は「ただ一向に念佛すべし」とお念佛の信仰への道をお示し下さいました。

では、何の為のお念佛なのかと申しますと、法然上人は念佛は自らのための勤めであるとおっしゃいました。

私は故人を偲び追善に念佛をお称えして頂くよう檀家の皆様にお話させて頂いております。

故人の願いとは私たちの幸せであり、お念佛を称え、往生することだからです。故人のためのお念佛が自分自身の往生の願いになっていく。お念佛は究極の幸せであり、極楽(楽、

幸せあるところ)へ往生するための行いなのであります。

しっかりとのお念佛を称えるということは、今をしっかりと生きることであり、今という時間を大切に生きることであると思います。

午後からは「てら活って何?」「寺院の未来について語り合おう」という内容にて、東海林良昌先生において頂き、寺院が抱えている問題、その

原因、寺で出来ることをグループで話し合い、発表致しました。仏教離れが進む中、多く上がっていた問題は過疎化であり、過疎化によって寺院・墓地の運営が出来ず、消滅する寺院が増えっております。

都会に行かなくても地方で仕事が出来るように国や行政レベルで整えていく必要があります。

寺院としては今まで儀礼を中心としていたので仕事の幅が狭くなったのだと思います。

本来の寺院の役割は儀礼だけを執り行うのではなく、人々にどんな生き方をすれば良いか導いていくことであり、気軽に立ち寄って頂ける環境作りが必要です。

新しい寺院のあり方として、エンディングノート「緑の手帖」や介護者カフェの展開などが提案されました。

運営の仕方は色々ございますが、地域に合った運営の仕方が求められております。



令和4年12月5日 法式講習会 不断光院



正覚寺 副住職 細瀧聡司 そうし

この度鹿児島県垂水市の正覚寺の副住職を勤めることになりました、細瀧聡司（そうし）と申します。

去年の3月に京都の佛教大学を卒業を経て、4月からゆかりの地である鹿児島で副住職を勤める事が出来る事をとて光栄に思います。

父は明照寺の住職である細瀧慶輔です。檀信徒1人1人にしっかりと寄り添える僧侶になれるように日々精進して参りますので今後ともよろしく願います。

先日法式研修会に初めて参加させていただきました。本格的な法式をするのは一年ぶりであり、色々と思い出しながら法式を行っていました。が上手くできず、自分の未熟さを改めて感じました。この研修会を通して、一日一日を大事に日々勉強をしていき、また精進をしていかなければいけないと改めて感じました。

副住職としてもう半年が経ちますが、一日も早く立派な僧侶になれるように頑張っていきたいと思います。



永江憲昭先生に御指導を頂きました



三州教区 寺院紹介

鹿児島組 指宿 大山寺
副住職 福富裕一

大山寺の前身は、明治三十六年に現在の指宿市山川福元にできた浄土宗開教院でした。大正十五年に現在の地、指宿市山川大山に移転し大山寺となりました。

本尊は阿弥陀如来坐像。「嘉永六年冬十二月南の島の住人」という銘が彫られています。

嘉永六年は一八五三年。

伝え聞いた話によると、この像は作者のお母さまの菩提を弔う為にこの像を彫られたそうです。

その両肩には肩掛けがかけられ、お腹には腹巻をしており、親が子を、子が親を思う心を表しているそうです。

今日も手を合わせ、念仏する私たちを暖かく見守ってくださいています。

年間行事

- ・ 一月 修正会
- ・ 二月 御忌会
- ・ 三月 春彼岸会
- ・ 四月 降誕会
- ・ 八月 施餓鬼会
- ・ 九月 秋彼岸会
- ・ 十一月 十夜会

降誕会は生け花教室の方々に花を活けていただき、とても華やかな堂内でお勤めします。お参りになる方々の明るい笑顔がとても印象的です。

